

# エチオピアの日本語教育 2024-2025

古崎陽子（メケレ大学）

ミキアレ メブラツ アレガウィ（ラスフジ日本語センター）

コロナ禍と内戦による3年近くの完全休止を経て2024年5月よりメケレ大学で復活したエチオピアの日本語教育だが、新しい動きとして2025年5月よりラスフジ日本語センターという新しい機関が立ち上がり、現在はオンラインで日本語教育を開始している。これによりエチオピアの日本語教育機関は2機関となった。それぞれの機関での日本語教育の状況と課題について報告する。

## 1 メケレ大学日本語講座の状況

### 1.1 概要

メケレ大学の日本語講座は、休止前と同様に課外講座として実施している。現在は理系キャンパスと文系キャンパスの2拠点で実施しており、講師は文系キャンパス担当のテスファイと理系キャンパス担当の古崎（筆者）となっている。2024年8月まではミキ（筆者）も担当していたが、日本の国際協力関係の仕事に就職したため離職した。残った2名の講師のうち、テスファイはフルタイム、古崎は日本企業のエチオピア事業とのパートタイムとなっている。



図 1 メケレ大学日本語講座の様子

休止前の日本語講座では、A2 レベルや中級レベルの学生も毎年10名程度いたが、全員卒業してしまい、現在は個人講座で教えており今回のサブサハラア

フリカ日本語スピーチコンテストで優勝したダウィット以外は全員 A1 前半レベルの学習者となっている。教材は A1 レベルについては休止前と同じく「みんなの日本語」を元に作成した手作り教材、中級については「できる日本語」を使用している。

2024-25 年度において学生は 270 人が登録したが、1 学期（学習時間 30 時間程度）を完了したのは 35 名のみであった。講座休止前は登録者の三分の一程度が 1 学期以上を修了していたのに比べ、修了率が大幅に低下してしまっている。

## 1.2 メケレ大学日本語講座の課題

メケレ大学日本語講座の課題としては、大学のスケジュールが依然として流動的であること、輪転機などの設備が足りていないこと、また、不安定な治安のため、日本大使館からの協力を得にくい状況が続いているということが挙げられる。

まず大学のスケジュールであるが、メケレ大学は 2023 年 8 月に再開した後、2 年以上の閉鎖期間によるティグライ人学生たちの遅れを取り戻させてできるだけ早く卒業させようとして、各学期を通常より短くしようと計画してきた。ただ、そもそも無理のある計画だったこともあってずるずると遅延が発生し、結果として「試験や休暇のスケジュールがまったく読めない」状況になってしまっている。2024 年からは学期のスケジュールが安定することを期待していたが、未だに混乱状態が続いてしまっている状況である。また、新入生と上級生の試験期間や休暇期間も相変わらずバラバラで、それぞれに不安定である。そのため、休止前に年次で開催していた日本語講座修了式、弁論大会、日本文化祭などかなり前から計画が必要なイベントの開催が非常に難しく、まだ開催できていない。

また、学期自体が流動的なだけでなく、学期中の専門の授業の実施自体も流動的な状況である。学期の前半は休講にしている試験期間の直前にまとめて授業をする教員が少なくないらしく、学生は試験前に急激に忙しくなることが多いようだ。メケレ大学の特に上級生はほぼ全員がティグライ州内の近隣から来ている<sup>1</sup>ため、専門の授業がないと気軽に帰省してしまう。そのため、日本語の

---

<sup>1</sup> メケレ大学はエチオピア全土から学生を受け入れているが、ティグライ州外からの学生は内戦中に他の大学に配置されて卒業済であるため、復学した上級生はティグラ

授業をしても帰省中の学生が多くて出席率が悪かったり、学生がキャンパスに戻ってきて出席率が急上昇したと思ったらすぐに試験目前となりまた出席率が急落したり、といった状況が続いてしまっている。

更に理系キャンパス特有の不利な状況としては、担当の古崎がパートタイム勤務で時折の出張のため休講せざるを得ないこともあること、また日本語講座を開講している教室が入っている近辺の建物の電気供給が不安定で、電気が使える建物が2、3週間ごとに入れ替わるため、頻繁に突如教室を変えざるを得ないことがあげられる。そのため「開催期間中は決まった教室で決まった時間に授業をする」ということが理系キャンパスでは実現できておらず、課外講座としては学生が参加しやすいとは言えない状況になってしまっている。こういった状況が、休止前より修了率が大幅に落ちてしまった要因の一つだと考えている。

スケジュールや専門の授業の状況については今後、少しずつ安定していくことを期待しつつ、日本語講座としても不安定な学期スケジュールに慣れていかなないといけないと考えている。また、専門の授業がない期間でも日本語講座に参加するためにキャンパスに残ろうと考えてもらえるような魅力的な授業ができるよう、精進していきたいと考えている。

輪転機の故障により紙媒体の教材を配布しづらいのもネックになっている。講座休止前は日本語講座の教材についても比較的自由に輪転機が使えたが、内戦中に放置されたことにより日本語講座を管轄する社会科学・言語学部の多くの輪転機が壊れてしまっており、基本的には試験用にしか使えないようになってしまっている。そのため昨年よりエチオピア日本語教師会(JLTAE)のウェブサイト<sup>2</sup>で教材の公開を始めたが、スマホの容量やデータ通信の問題もあり、一部の学生しか活用できていないようで、以前より教えた内容が定着しづらくなったと感じていた。今年度からの新たな対応として、日本語の表記をアルファベットだけに<sup>2</sup>して2 ページで1枚の印刷にし、ポイントを圧縮した配布用の資料を作成した。なお、日本語講座を管轄している外国語学科の学科長からはプ

---

イ州の学生となっている。また新入生についても未だに続く政情不安の影響で他州の学生は非常に少ない。

<sup>2</sup> メケレ大学の日本語講座ではゼロ初心者よりカタカナ、ひらがなを教えるが、本格的に漢字の勉強が始まる100時間程度までは教材や試験での日本語の表記はアルファベットとしている。これは、初心者の授業は、日本や日本語に軽く興味を持っている程度の学生に気軽に受講してもらいたいと考えているからである。

リントや輸転機購入のための資金を日本から取ってきてほしいと要望を受けている。

また、メケレは内戦終結後の2024年10月に危険レベル2に引き下げられたものの、政情不安により2025年3月に再びレベル3に引き上げられ、日本大使館の方にメケレに来ていただくことができなくなってしまった。コロナ禍の前は大使を含む日本大使館の方々に頻りにメケレに来ていただき、修了証書も日本大使館とメケレ大学社会科学・言語学部の連名で作成していただくなど、日本大使館には多大な協力をしていただいていた。しかし、最後に日本大使館の方に日本語講座関連でメケレに来ていただけたのは5年以上前の2019年12月の日本文化祭で、現在の大使館には当時をご存知の職員の方がほとんど残っていない状況である。それに加えて復活後の講座で実際に学生が学んでいる様子を確認していただくこともできない中、大使館は日本語講座の支援に積極的にはなりにくいようで、現時点では連名の修了証書の作成についても、まだ了承が得られていない状況である。

このような状況で、メケレ大学の日本語講座はなかなか復活後に急激に以前の状況までリカバリーというわけにはいっていないが、修了率が低くなったとはいえ、非常にやる気がある優秀な学生たちも出てきつつあり、そのような学生を教えるのは喜びである。メケレ大学の日本語講座の実績を、現地人講師のテスファイと一緒にまたコツコツと積み上げていきたいと考えている。

## 2 ラスフジ日本語センターの状況

ラスフジ日本語センター (<https://rasfujinihongo.com/>) は元 ABE イニシアティブの留学生で現在は日本企業のエチオピア事業で働くハブトムとメケレ大学とアディスアベバ大学で日本語教師の経験があるミキ（筆者）により、エチオピアと日本の架け橋になることを目指して設立された機関である。ラスフジという名前は、エチオピアの最高峰であるラス・ダッシェン山（4,550m）と、日本の富士山の2つを掛け合わせてできたもので、ロゴも山をかたどったものとなっている。

ラスフジ日本語センター設立の背景として、アディスアベバ大学の講座がコロナ禍を機に閉鎖されてしまい首都アディスアベバで日本語を学べる場所がなくなってしまう一方、エチオピアでも日本のアニメや漫画に興味を持つ人が増えてきたなどの理由で日本語学習への関心が高まっていたことがあげられ

る。日本や日本語とのつながりを持つ設立者の2人は、ラスフジ日本語センターの設立により、このような需要に対応しようと考えた。



図 2：ラスフジ日本語センターのロゴとホームページ

ラスフジ日本語センターは 2025 年 5 月よりオンラインで授業を行っており、現在は 13 名の生徒が学んでいる。教材は「みんなの日本語」を基本としているが、各ボランティア講師の裁量に任せている。授業料は徴収しておらず、講師・運営の双方ともボランティアによって行っている。ほとんどの生徒は初歩から学習を始めており、全員が A1 前半レベルである。学習の動機としては、日本のアニメなどに興味を持っている生徒、日本関連の仕事についている生徒など様々である。

ラスフジ日本語センターでは、これからもっと多くの学生を受け入れていきたいと考えている。また、センター設立の「エチオピアと日本の架け橋になる」という目標実現のため、日本語の授業だけでなく日本の文化やビジネスとのつながりも強化していきたいと考えている。皆様の温かいご支援とご協力を賜れば幸いである。

### 3 教育、文化、ビジネス、国際協力をつなぐ日本語教育を目指して

現在、古崎はパートタイムの日本語教師となっているが、古崎が業務委託で関わっている日本企業について紹介したい。フクナガエンジニアリングという大阪の中小企業だが、エチオピア事業に取り組んでいる。今までエチオピアに来る日本企業は非常に少なく、日本語を勉強した卒業生が日本関連の仕事につける可能性はほとんどなかった。しかし、フクナガエンジニアリングは英語が流暢にできる社員が少ないこともあり、日本語ができるエチオピア人は歓迎される。メケレ大学を卒業後も日本語の学習を続けて中級レベルに到達した古崎

の教え子も採用してもらうことができ、本社とのコミュニケーションで日々日本語を活用している。このように日本語を学び、日本に興味を持ってきている学生たちが日本関係の仕事に就ける機会がでてきたということは、日本語を学ぶ優秀なエチオピア人学生と、現地で事業展開する日本企業の双方にとって、有益であると考えている。

なお、ミキとともにラスフジ日本語センターを共同設立した元 ABE イニシアティブ留学生のエチオピア人もフクナガエンジニアリングの社員でエチオピア事業の中心となっている。彼はミキとともに個人としてラスフジ日本語センターの設立をしたが、フクナガエンジニアリング自体も日本語人材の育成にも興味を持っている。

2019年9月にエチオピアで開催した第1回アフリカ日本語教育会議の際は、フルタイムの日本語講師が4名、パートタイムの講師が2名いたが、現在はフルタイムの講師はメケレ大学のテスファイのみとなり、古崎とミキはそれぞれパートタイムで教えている。そのため、日本語教育に割くマンパワーとしてはなかなか2019年時点に及ばないが、日本語教育関係者が教育の枠を超え、ビジネスや国際協力の分野にも関わることで、相乗効果を生み出していきたいと考えている。